論文

ユーモアに対する理解を深めるための英語教育の実践

児嶋寿子（大阪府立工業高等専門学校）

1．はじめに

国際化時代の到来を背景に、日本の生徒が、文化が異なる外国人と上手に英語で意思疎通する能力を習得することは必須である。文部省高等学校学習指導要領でも、相手の意向を理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的なコミュニケーション能力を養うことを外国語科の目標に掲げている。

実践的な英語によるコミュニケーション能力を養うためには、生徒が基本的な文型・文法・語彙・会話表現・発音を習得することが必要であることはもちろんであるが、筆者はこれに加えて、英語の授業を通じて生徒がユーモアへの関心を高めることも必要であると提起したい。なぜなら、ユーモアが英語のコミュニケーションにおいて重要な機能を果たしており、ユーモアへの理解を深めることも、外国人とうまく意思疎通を行って相互理解を深めることへの一助になると考えられるからである。大島（2001）は、ユーモアが気まずい雰囲気を一転させてその場を明るくしたり、緊張をときほぐして会話をはずませたりして、コミュニケーションにおいて重要な機能を果たしていることを指摘し、ユーモアが外国人とコミュニケーションをうまくこなすための重要な要素であることを説明している。Tannen (1995)も、会話におけるユーモアの使用が相手との親和を築いたり、和やかな雰囲気を作ったりするのに役立っていることを事例を挙げて説明している。

大島（1998）はアンケート調査も行い、欧米人が初対面でお互いの緊張を取り除くためにユーモアを使用する傾向が強いことを紹介している。また欧米人が気まずい雰囲気を修正するためにユーモアを使用して状況を乗り切ろうとする意識が日本人に比べて強いことや、日本人も欧米人も楽しい雰囲気を作るためにユーモアを使用し、ユーモアを使うことによってコミュニケーションがよりよく図れるという意識を持っていることも紹介している。

この調査結果は、外国人にとってユーモアの使用が相手との相互理解を深めるための重要な方策となっていて、外国人が会話の中でユーモアを好んで使用する傾向があることを示すものである。従って、日本の生徒達が将来外国人とのコミュニケーションにおいてユーモアが使用されている場面に数多く遭遇する可能性があるわけであり、また自分自身も何かユーモラスなことを言ってみようと思うこともあるだろう。ところが、ユーモアに対する理解が不足している場合には、以下のような問題が生じる可能性がある。1）相手が言っているユーモアを理解できず、何が面白いのかも分からない。2）何か自分もユーモアを使用してみたいがどうやってユーモアを作り出せばよいか分からない。3）自分が言おうとしているユーモアが相手に場違いだとか不謹慎だと思われるかもしれないという懸念が生じる。コミュニケーションにおける不適切なユーモアが引き起こしうる最悪のケースとして、自分は面白い冗談を言ったつもりでも、相手の感情をひど

く傷付けてしまう場合を挙げることができる。実際にその一例として、2003 年に中国の西安市の大学構内で、日本人留学生が面白いと思って演じた寸劇が中国人の感情をひどく傷付けて大きな社会問題になった騒動を挙げることができる[1]。

これらの１）～３）の問題を解決するためには、日本の生徒がもっとユーモアへの理解を深めることができるように、ユーモアに関する英語教育をもっと積極的に学校で取り上げることが重要である。このような授業への取り組みが、生徒がコミュニケーション能力を高め、外国人との対話を楽しみながら相互理解を深めることにもつながると考えられるのである。本論文では、筆者が、ユーモアへの理解を深めることを目的とした英語の授業の実践報告を行う。

２．ユーモアに関する授業の実施計画

ユーモアに関する授業の実施計画を立てる際に、最初に生徒がコミュニケーションを行うにあたり、ユーモアに関してどのような能力が必要になってくるかを考慮し、それに基づいて既存の文部省検定教科書におけるユーモアの取り扱いも調べながら、各々のユーモアの能力を身に付けるためにどのような授業を行うのが適切であるか考察して授業計画の方針をたてることにした。[2]

ユーモアに関しては以下の能力と資質がコミュニケーションを行うにあたり必要である。

（１）相手が英語で話しているユーモアを理解する能力
（２）英語を用いて自分でユーモアを作り出す能力
（３）ユーモアに関して文化や国によって不適切なものと適切なものがあることを見極め、ユーモアを場面に応じて適切に使い分ける能力
（４）英語で話されているユーモアを積極的に楽しもうとする態度

（１）の能力を身に付けるためには、文法・語彙・会話表現など基礎的な英語力を身に付けると同時に、英語のユーモアや冗談にはどのようなものがあるか、事例を数多く学びユーモアに慣れ親しむことが必要である。ジョークやユーモアの事例を学ぶのに役立つ教材は、数は少ないものの文部省検定教科書でも取り上げられている。たとえばジョークやユーモアに富んだストーリーを読み、その内容を理解する教材が１３件あった。また英語の本文の内容にはジョークや笑い話は含まれていないが、Peanuts の漫画とその著者についてのエッセーの一部分に原作の４コマ漫画を挿入して、本文と同時に漫画の内容も補足的に理解させるという教材が４件あった。[3]全体の教科書の数からするとまだ数が少ないと思われるので、より多くの教科書で取り上げられることを希望するものである。教科書で生徒がジョークやユーモアを学ぶことで、もっと他のユーモアやジョークの事例への興味が広がってくると思われるのである。今回の授業実践ではユーモア満載の発話を生徒に視聴させることで生徒がユーモアやジョークへの興味や関心を高めることができるように配慮することが最初の段階として必要であると感じた。

（２）の能力の育成について考える前に、まずユーモアの定義を明白にする必要がある。ユーモアの定義は Brown and Keegan(1999)の定義を引用することにする。

"Humor is any written or verbal comment, or any action, that elicits reactions, within any boundary or grouping, in the form of laughter or amusement from the audience, and a change

in positive or negative attitude, emotion or feelings by the target.”（1999:50)

本論文では、生徒が文章の作成でなく、英語による発話を通してユーモアを作り出すことに焦点を当てており、生徒が発するユーモアを通じて態度の変化を相手に対して働きかけることを目標としていないため、筆者が教育現場で育成しようとする「ユーモアを作り出す能力」というのは、「聞き手が面白いと感じる内容の発話、話し手が面白いと感じる内容の発話を口頭で作り出す能力」と定義付けることにする。ただし面白さの度合いの程度については、時と場合によって話し手と聞き手で差が出るだろう。例えば、話し手が自分も聞き手もとても面白いと思うだろうと予測して話をしても、聞き手がそんなに面白いと思わない場合もあるだろうし、話し手が思っている以上に聞き手が面白いと思って大笑いする場合もあるだろう。

このような「ユーモアを作り出す能力」を身に付けるためには、文法・語彙・会話能力など基礎的な英語力を身に付けておくことが大前提であるが、それに加えてどういう場合にユーモアや笑いが生じるのかにも注意を払う必要がある。このようなユーモア発生の仕組みに注意を払うのに適した英語教材として文部省検定教科書でも１件取り上げられていた。“New Legend English Ⅱ”(開拓社：2003)に収められている ‘Laughter—Everyone’s Language’は笑いとユーモアの効能について述べており、その中で“Why do we laugh? What makes something funny?”と読者に問いかけている。また このエッセーに関連した発展的な章末問題として、ユーモラスな headlines を読んで、各々の headline がなぜ面白いのか説明しなさいという課題が載っていた。このような教材がもっと開発されて教科書でより一層取り入れられるのが望ましい。筆者は今回の授業実践の中で、生徒がユーモア発生の仕組みにもっと注意を払うのを目的に、どのような場合に自分たちは面白いと感じているか、自分の日常生活を振り返って考えるというグループディスカッションを取り入れることにした。

一方、どういう時にユーモアや笑いが生じるかについては、先行研究が多く理論を提示している。例えば、聞き手の期待を外す場合、聞き手にとって常識だと思っていることと不一致のことが生じる場合、話し手や聞き手の緊張やストレスが緩和される場合、ものまね、誇張などでユーモアが生じることが明らかにされてきている。[4]しかし、実際の教育現場でこのような理論だけを先に教えてしまうと、生徒が理論に固執して理論にあったものを無理に作ろうとしてユーモアがぎこちなく不自然なものになってしまったり、生徒が自発的に自然な形でユーモアを作ろうとする態度を阻害されてしまったりする恐れがでるため、筆者の英語の授業では、ユーモア理論を教えないことにした。理論を教えるのでなく、実際にユーモアが満載の発話を聞かせることで、どういう時に自分がユーモアや面白さを感じるのかを考えさせて徐々に気付かせていくという方法をとることにした。

また同時に、ユーモアを含む発話をただ見聞するだけでなく自分も実際に英語でユーモアを含む発話を作ってみるというのも「ユーモアを作り出す能力」を身に付ける上で重要である。生徒がユーモアを自分で実際に作り出す上で効果的であると思われる教材は、数はまだ少ないものの７件の文部省検定教科書で取り上げられていた。“Prominence

English I"(東京書籍:2003)と"Polestar English Course I" (数研出版:2003) "Lingua—Land English Course I"(教育出版:2003)は４こま漫画の最後の部分などせりふの一部分を英語で考えさせる練習問題を取り入れていた。 "Encounter English Series I"(秀文館:2003)は、せりふが全く書いていない Calvin and Hobbes の４こま漫画の中のふきだしの部分に英語でせりふを考えて書き入れるという練習問題と、グループで自由に４こま漫画を作るという課題、ダイアモンド・試験・虎の３つの言葉を使用してグループで興味深い（楽しい、悲しい、苦しい、奇想天外な）物語を作る課題を載せていた。 "Encounter English Series Ⅱ"(秀文館:2003)は、笑い話というタイトルが与えられてそのストーリーについて英語でスピーチをするという活動を載せていた。 "New Legend English Ⅱ"(開拓社 : 2003)は、４こま漫画で描かれているストーリーについて英語で話してみるという練習問題を載せていた。"Polestar English Course Ⅱ" (数研出版:2003)では、英語落語の White Lion を登場人物の気持ちになって演じてみようという活動を取り入れていた。これらの課題や活動は英語でユーモアを作り出す能力を身に付ける大変良いきっかけとなっているが、課題の中に問題点を含むものもある。まず何もない状態で笑い話や興味深い話を英語で作りなさいと指示を受けると、生徒がどうすればよいか分からずとまどってなかなかストーリーを作れず苦労してしまう場合がある。やはり、もっと教師側がユーモアを作り出すためのヒントを提供するのが望ましいと思われる。また与えられた漫画のせりふを考える活動だけでは、あらかじめユーモアのシチュエーションが完全に固定されているため、自分にとって面白いことを自由に英語で話したり、相手との自然な会話の中で聞き手が面白いと思うユーモアを臨機応変に作り出したりする能力を身に付けるための活動としては不十分である。従って、もっと自由なシチュエーションで生徒がユーモアを作る場を教師が授業中に提供する必要があると思われる。

従ってこれらの問題点を改善する試みとして、筆者は、まず生徒にユーモアや笑いが満載の発話を聞かせることで、どういう時に自分や聞き手がユーモアや面白さを感じるのかを考えさせて、生徒が以前よりもユーモアへの理解を深めた上で、自分たちのユーモアを実際に自作の会話の中で作らせることにした。

（３）の能力を身に付けるのに適切であると思われる教材は文部省検定教科書の中に見当たらなかった。ジョークを紹介する英語の雑誌の中には、ジョークを紹介する際に、これはどのような相手に対して使っていいとか悪いとか説明を書き加えているものもあるので、このような情報がもっと学校の教科書で取り上げられることを期待するものである。[5]また同時に英語のコミュニケーションにおけるマナーとか礼儀なども、学校の教育現場でもっと取り上げられることを希望するものである。今回の筆者の授業実践ではジョークの使い分けやマナーや礼儀を教えることは時間的な制約もありできなかったため、事前に生徒に友達を中傷するようなユーモア及びいじめや悪口につながるようなユーモアを作らないように注意することにとどめた。おかげで聞き手が不快に感じるようなユーモアを作る生徒はいなかった。

（４）の資質を身に付けるためには、まず生徒がユーモアの大切さを知ることが必要である。ユーモアの大切さを学ぶのに適切な教材が２件文部省検定教科書の中で取り上げられていた。 "New Legend English Ⅱ"(開拓社 : 2003)では、'Laughter—Everyone's

Language’ というエッセーの中で笑いやユーモアが健康のために必要であることを述べている。 “Unicorn English Course Ⅱ”(文英堂:2003)では、Patch Adams のエッセーの中で、患者を助けるためにはユーモアも大変大切であることを訴えている。ユーモアの大切さを述べたエッセーがより多くの教科書で取り入れられて、ユーモアの大切さを生徒が知るチャンスを教師側が与えることが望ましいと思われる。また（４）の能力を授業の中で身に付けるには、生徒一人一人が、会話におけるユーモアの大切さを知り、実際に会話の中でユーモアを作ってみるという実践を通してユーモアを作ったり聞いたりする楽しさを知ることが大切だと思う。筆者もユーモアを作ることは楽しいのだと生徒が感じられるよう授業の雰囲気を少しでも明るく楽しいものにするように努めることにした。

３．ユーモアに関する授業の実践内容

筆者は自ら勤務する高等専門学校において、平成１５年度において３年生の英作文の授業を２クラス担当していた。３年生の生徒は１～２年生の間に基礎的な英会話の授業と文部省検定教科書の英語Ⅰと英語Ⅱを使用した英語の授業を受けている。本校の３年生の英作文の授業では英作文の検定教科書を使用した通常の英作文の授業に加えて外国人英語指導員（ＮＥＴ）との team teaching の授業を２週間に１時間の割合で行い、そのＮＥＴとの共同授業の際に生徒によるスピーチ等のプリゼンテーションやコミュニケーション活動を行うことにしている。筆者が１～２年生の英会話でなく３年の授業で実践することにした理由は、ユーモアを英語で作り出すには基礎的な英語力が必要条件になるため、基礎的な英会話力を１～２年の間に身に付けた上でユーモアに関する授業を行う方がユーモアに対する理解を深めてユーモア作成能力を向上させる上で効果的と思われたのである。

筆者の授業では、まず生徒がユーモアに対する理解を深め、自分でユーモアを作り出すことに興味を持たせた上で、実際にユーモアを自作の会話の中で作らせるという段階をおった指導を行うことを基本方針にして、それに従って授業を計画して実践した。まず、ユーモアや笑いが満載の教材として英語落語のビデオ “Wonderful Japan” （1999）を生徒に視聴させることにした。この教材は Diane Orrett が、Jeff というイギリス人が日本で経験したカルチャーショックについて、落語で演じたものである。筆者がこの教材を選んだ理由は、この落語では聞き取りやすい英語が話されていて生徒が落語の中で話されているユーモアの内容を理解しやすいと思われたからである。また落語のトピックが現代の異文化間コミュニケーションを扱ったものであるため、生徒が異文化コミュニケーションへの関心を高めたり、文化の違いが背景となるイギリス人のユーモラスな経験を楽しみながらユーモアへの理解を深めたりするのに適切であると考えたからである。

実際の授業ではこの英語落語のビデオを生徒が１度視聴して、まずアンケート形式で英語落語の感想や自分が面白いと思った場面や内容を書いて提出させた。生徒がアンケートに答えることで、自分が面白いと思った内容について各自が整理することができるため、アンケートを実施した。

次の授業で生徒はもう一度英語落語のビデオを見た後で、４人１グループの班ごとに、

今回視聴した英語落語やユーモアについて英語でディスカッションを行った。班ごとに話し合う項目では、まずこの落語の内容についての理解を問うものと全般的な感想を問うものと異文化コミュニケーションに対する意識を高めるものを取り入れた。以下がDiscussion Topics の例である。

(1) What was Jeff surprised about Japan? Please explain the experiences which were surprising to Jeff.

(2) What do you think of Jeff's experiences with culture shock? Why do you think so about his story?

(3) What did Jeff think wonderful about Japan? Do you agree with Jeff about wonderful things about Japan? In your opinion, what is a good point about Japan?

(4) What do you think of this rakugo "Wonderful Japan?" Please give your impression.

(5) Suppose you got a culture shock in a foreign country. How would you handle the culture shock? Please choose from (a) to (g)

(a) I would get angry. I would complain.

(b) I would feel depressed. I would get rid of my stress by doing other things.

(c) I would try to forget it. I would try not to think about it.

(d) I'd try to understand it.

(e) I'd discuss my shock with my friends.

(f) I'd try to think it was interesting. I'd try to enjoy it.

(g) Others (Please explain in your own words)

落語のユーモアの理解のためには、まずその話されている内容を理解していることが前提になる。それと同時に落語が取り扱っている話題・文化・シチュエーションに関連した背景的な知識をきちんと理解していることも必要である。従って、（1）から（5）のように、この落語が扱っている異文化コミュニケーションの話題に関連した質問および落語のストーリーの内容について生徒が話しあうことは、その落語のユーモアをよりよく理解するための土台を作る上で有効であると思われる。次に生徒が落語についての理解を深めた上で、"Wonderful Japan"のユーモアについての話し合いを行った。"What scene was interesting for you in 'Wonderful Japan?' What do you think was an interesting point in this rakugo?" という項目について各班ごとに話し合い、意見交換を行った。

今回のディスカッションでは落語におけるユーモアから更に発展させて、日常生活におけるユーモアについても班ごとに話し合った。以下、その Discussion Topics の例を挙げる。

1) Have you experienced an interesting incident in your life? Please explain one interesting incident, humorous incident, humorous conversation, or interesting story you have had in your life. Why do you think this incident is interesting?

2) When do you feel something is funny or interesting?

各班は、話し合いの中で出てきた意見を各々の項目ごとにすべて英語で記録して、後日班ごとにレポートとして提出した。生徒のレポートを点検していると、今回の落語そのものが分かりやすかったこともあり、この落語において面白かった点をよく理解でき

ていたようであったが、日常生活におけるユーモアについて話し合うのは難しく、十分に意見が出なかった面もあるようである。また面白い体験について書いている英文がまだ稚拙で、なかなか読み手に面白さが伝わりにくいこともあったので、英語による表現力の指導を一層充実させることの必要性を痛感した。

また一方で落語のユーモアへの理解を深めるには、落語の表現方法や一般的なルールへの理解も必要であると思われたので、"This is Rakugo" (1999)のビデオも授業中に視聴した。このビデオでは英語落語の考案者山本正昭の解説に合わせて、桂かい枝が実際に英語落語の一部分を少しずつ演じて、落語のルールや表現方法について観客に分かり易くユーモラスに伝えている。このビデオを見ると、単に言葉だけでなく顔の表情・大げさな立ち居振る舞い・声の調子も落語のユーモアを形成するのに大きな役割を果たしていることが分かる。実際の授業ではビデオを視聴して、話の内容を把握できたか確認するための質問事項に対して英語で答えて内容を確認するという活動を行った。質問例としては、"What can facial expressions describe in rakugo?" や"What kinds of sounds effects did taiko and shamisen produce in the rakugo?"などがある。落語に限らず実際の会話においても顔の表情や口調やジェスチャー等もユーモアを作り出す要素として働く場合が多いので、このようなビデオを見ることもユーモアへの理解につながり意義のあることだと思われる。

ある程度ユーモアや笑いについての関心を高めて理解を深めた上での次の課題として、生徒に Humorous Skit Performance をしてもらった。この活動では、生徒が２人以上４人以下のグループを作って、グループごとに自分たちが面白いと思う対話・寸劇を英語で作成して発表を行った。対話のトピックは学校生活・行事・日常生活など自由であるが、必ず自分たちが「面白い」と思う自作の英語の会話を、２人組の場合は４分、３人組の場合は６分、４人組の場合は８分という時間の長さで作るというのが条件である。なおこの対話では、ナレーションも必要に応じて少しは入れてもよいことになっているが、ナレーションばかりで会話がないのは認めないことにした。また特定の人だけがしゃべって他の人がしゃべらないことがないようにグループ内で全員が必ず会話のせりふをしゃべらなければならないという規則を設けた。さらに各々の発表が終わった直後に、NETがその発表の内容に関連した質問を１個か２個行い、グループの中の誰かがそれに対して英語で答えなければならないという規則も付け加えた。

対話の原稿は必ず事前に書かせて、発表終了後に今回の発表に対する感想なども書き加えたものをグループごとに提出させた。実際に原稿を準備する段階になると、生徒が英語で「自分達にとって面白いこと」を表現するのはかなり難しかったようである。事前に表現や原稿の英文チェックの相談に乗るようにしていた。その際に教員側が原文を生かしながら表現を工夫したり誤文訂正をしたりして、発表者が感じている面白さが観客に対してできるだけ伝わるように工夫した。本校の生徒の英語力のレベルでは、この事前指導を十分に行ってはじめて本番での発表がうまくいくように感じた。

発表の本番では、グループによっては、自分たちの会話を観客によりよく理解してもらうための小道具・写真・注釈を書いた紙を使用したりして、会話をより生き生きとしたものにしていた。写真や注釈を書いた紙は、LL 教室の教材提示機を使って各生徒のブ

ーステレビや大型テレビに映し出せるようになっており、生徒が発表者の会話を理解する助けになっていた。また小道具を工夫するだけでなく、話し方や動作を工夫する班も多く見られ、分かりやすくかつユーモラスに発表しようとする発表者の努力が多く見られた。

生徒の発表は本校の外国人英語指導員（NET）が、内容、独創性、英語の正確さ、伝達能力、発音、声の大きさを総合的に評価して、各個人の評価シートに２０点満点で点数をつけた。このシートには点数の他に、内容・独創性・伝達能力など特にすぐれていたらその箇所に丸印を入れ、英語の発音や伝達能力で著しい問題がある場合はその箇所に×印を入れ、その他気付いたコメント等も書いて生徒に返却した。発表を聞いてどれくらい面白かったかについては、NET は成績として評価していない。なぜなら、面白さの基準は各個人の出身地や価値観によっても異なってくるため、オーストラリア人の本校の NET 一人がどれくらい面白いかを客観的に評価してそれを点数化して成績評価に入れるのは無理があると思われたからである。

しかし一方で、聞き手側の生徒は各々の発表を「とても面白かった」「まあまあ面白かった」「普通」「どちらかといえば面白くない」「おもしろくなかった」と５段階で評価することを試みた。またこの発表を見て自分が面白いと感じた部分はどこであるか、また各々の発表に対する印象・感想・気付いた点を日本語で記述させた。このような評価活動を通じて、自分は何を面白いと感じるのか、発表者が面白いと思って演じている対話を自分も面白いと感じることができるか生徒各々が考えて、ユーモアや笑いに対する意識を高めることができる。生徒側の評価活動はユーモアへの理解を各自が深めることを目的にして行ったものであるため、このアンケートにおける評価結果は生徒に知らせることをせずに、授業担当者が回収して今後の授業運営のための参考資料にすることにとどめた。

学生の評価を見ていると、発表者自らがあまりに恥ずかしがって笑ってばかりいたものや、声が聞き取りにくいものなどに対する面白さの評価は概して低かった。また淡々と会話をするものよりは、オーバーなアクションを使ったり口調を工夫したりしているものの方が観客の笑いも大きく面白さの評価が高かった。このようにユーモアを演じていくには、話の内容と同時に演じ方が重要なポイントになってくると思われるので、今後は話し方等の発表方法の指導が必要になってくると思う。

発表した生徒の感想であるが、やはり「英語で人を笑わせることは難しい。」「準備が大変だった。」「自分達が言いたいことを観客に上手に伝えるのは難しい。」という感想が多かった。実際の準備の途中でも「今回の課題は難しい！」という意見が数多く寄せられて大変な面は多かったが、発表当日はみんなよく頑張って演じていたと思う。また観客も、面白さの評価のアンケートを記入しないといけないこともあり、「どんな面白いことを言うのかな」と期待して聞いているので、聞き手の態度も大変良いものになった。また努力のかいあって面白い発表が多くて、授業中に観客からの笑いが頻繁に起こっていた。発表の内容も先日の文化祭での面白い体験など日常生活を振り返ったものや、自分たちで新たに劇やコントを作成したもの、自分達の好きなスポーツや趣味を話題にしたもの、自分達の面白い友人を紹介したもの、こっけいなクイズ大会、面白い心理テス

トなどバラエティーに富んだものになった。観客に一番受けて NET の評価も高かった発表の一つとして、定期テストが返却された時のクラスのみんなの反応を、一人が教師、一人が生徒の役になってコント形式で演じるものがあった。100 点取ってもそれを顔の表情に見せない人や、他人のテストの点を聞きまくる人など色々なタイプの生徒をコミカルに演じ分けて、「人の反応を注意深く観察するとこんなに面白いですよ。」と締めくくる発表で、観客による面白さの評価も大変高いものであった。このように課題は難しかったものの、英語で自分自身や聞き手にとって面白い内容の対話を発表するという形式の授業は概ね成功したといえるだろう。

4．おわりに

今回の授業での色々な活動を通じて、生徒が以前よりもユーモアに対する関心を高め、理解を深めることができたが、今回の授業実践に関してはまだ問題点や課題も色々ある。まずユーモアの教材として筆者が使用したものが英語落語であったため、生徒が内容を理解するのは容易であったものの、落語が扱う内容やユーモアが日本に関連したものばかりであり、英米のユーモアについての理解が授業を通じて深まっていないという点である。筆者の考えとしては、ユーモアは難しい題材なので、まず日本のユーモアや落語など生徒達が取り組み易い教材からスタートしてユーモアへの関心を高めて、その次の段階として、アメリカやイギリスの面白い映画やスタンドアップ・コメディーなどで特に面白い部分を一部抜粋して生徒に視聴させて、「どういうところが面白いか」、「もし自分達にとって面白い箇所がなければそれはなぜなのか」、「映像が取り扱っているユーモアと同様のものが自分達の文化でも存在するのか」などを生徒間でのグループ討議を通じて考えさせれば、英米へのユーモアへの理解も深まってくると思われる。このような活動を行うのに適切な教材を開発していくのが今後の課題になってくると思われる。

また今回の授業形態では、生徒は自分達にとって面白い内容を発表するため、自分の所属する文化の中において面白いことを演じることになる。例えば発表の中には、ある生徒が質問をすると、わざと相手が的外れな答えを言ったり、言った答えに対して相方がつっこみを入れたりする「ぼけとつっこみ」の対話が頻繁に見られた。また相手が質問をした際にわざと無視をして答えず、別の会話を進めて笑いを取ろうとする場面も一部見られた。これらの手法は、日本の漫才や喜劇でよくとられる笑いの技法であり、まさに日本におけるユーモアを表現するものである。今回の発表では、日本人のユーモア感覚で日本のユーモアを英語で表現することには成功しているものの、英語圏のユーモア感覚を取り入れ、英語圏のユーモアを表現することにはつながっていない。従って、今後は英語圏のユーモアを映画等のビデオ教材で学びながら、自分達もビデオと同じようなシチュエーションでユーモアを作ってみる等の実践練習なども英語圏のユーモアを理解していくのに必要になってくるであろう。

さらに今回の実践では、ユーモアに関して文化や国によって不適切なものと適切なものがあることを見極め、ユーモアを場面に応じて適切に使い分けるための指導ができていなかった。今後はある種のユーモアがどのような場面で誰に対してなら使ってよいのか、どこの文化圏においても受けるようなユーモアにはどのようなものがあるか等、ユ

ーモア使用に関するマナーの体系的な指導も必要になってくると思われる。[6]

このように今回の授業実践にはまだ色々と課題が残されており、ユーモアに関する教材開発の難しさを痛感した次第である。しかし、今日の国際社会においてユーモアが英語のコミュニケーションにおいて重要な機能を果たし、人々が相互に理解を深める手助けになっているからこそ、学校教育の現場においてユーモア教育を一層充実させていく意義は大きい。日本の生徒たちが今後より一層ユーモアへの理解を深めて、ユーモアを交えながら外国人と楽しく対話をすることができる能力を身に付けていくことを願いながら、これからもユーモアへの理解を深めるのに役立つ教材の開発に努めていきたいと思っている。

[注]

1）２００３年１１月１日付の朝日新聞をはじめとして、日本人留学生が中国西安の大学で行った寸劇に対して中国人の反発問題が起こったことを多くのメディアが報道している。

2）文部省検定教科書におけるユーモアの取り扱いについての調査は、各教科書会社へ問い合わせて、口頭、文書、電子メール等で返事を頂いたのと、実際に教科書を見て確認する方法を取った。

3）"Power on English I"(東京書籍:2003)、"Unicorn English Course I"(文英堂:2003)、"Sunshine English Course Ⅱ" (開隆堂:2003) 、"Polestar English Course I" (数研出版:2003)で Peanuts の漫画が取り上げられている。

4）Morreall, John (1983) "Taking Laughter Seriously"をはじめとして、織田正吉(1980) 『笑いとユーモア』、加島祥造(1986) 『アメリカン・ユーモアの話』、長島平洋(1998)「笑いの原因用語の領域」が、ユーモアや笑いの仕組みや理論を分かり易く解説している。

5）例えば"Current English"はユーモアや英語落語を特集記事に取り上げており、その中で、村松（2003）は"It's a senior moment."というジョークを若い人が年長者に言うと嫌味や失礼になることを説明している。また Harlan（2001）は友達のお母さんをけなすジョークはタブーであることや、人をけなし過ぎることは人を傷つけることにつながると述べている。

6）Harlan（2001）は、どこの文化圏に行っても受けるようなものは個人的な体験談や失敗談であると述べており、また Harlan（2004）でも、教科書に載っていない外国人を笑わせる５つのポイントを解説している。このような情報がもっと学校の教育現場でも取り上げられることを筆者は希望している。

参考文献

Brown, Berman Reva., and Keegan, Dermott (1999) Humor in the hotel kitchen. Humor: International Journal of Humor Research 12 (1), 47-70.

Harlan, Patrick (2001)「日本でお笑いを目ざすアメリカ人、外国人を笑わす方法教えます!?」『Current English』１１月号 研究社

Harlan, Patrick (2004)「教科書に載っていない！パックンの外国人を笑わせる５つのポイント」『NHK 英語でしゃべらナイト』アスコム
Morreall, John (1983) Taking Laughter Seriously. State University of New York Press, Albany.
Tannen, Deborah (1995) Talking from 9 to 5: women and men in the workplace: language, sex and power. New York: Avon Books.
大島希巳江 (2001) 『世界を笑わそ！』研究社
大島希巳江 (1998) 「日米比較調査の報告：ユーモアの使用域と笑いへの意識」『笑い学研究第５号』
織田正吉(1980) 『笑いとユーモア』筑摩書房
加島祥造(1986) 『アメリカン・ユーモアの話』講談社
長島平洋 (1998) 「笑いの原因用語の領域」『笑い学研究第５号』
村松増美 (2003) 「自分を笑いの種にする勇気を」『Current English』２月号
文部科学省 (1999) 『高等学校学習指導要領解説：外国語・英語編』
『Current English』２月号 (2003)—特集—英語で笑いをとる 研究社
『Current English』１１月号 (2001) —特集—英語 RAKUGO のすすめ 研究社
『NHK 英語でしゃべらナイト』(2004) アスコム

ビデオ
This is Rakugo (1999) 「第４回 HOE 寄席」H.O.E.インターナショナル
Wonderful Japan (1999) 「第４回 HOE 寄席」H.O.E.インターナショナル